

母の残した言葉

ご讃題 眞実信心は必ず名号を具す、名号はかならずしも願力の信心を具せざるなり (「信文類」三一問答、註釈版聖典 P245)

一、ご讃題のお心

ご讃題は、「阿弥陀如来から眞実信心を頂戴すれば、必ず称名念仏が伴って出て下さる。逆に、称名念仏しているからといって、必ずしも本願他力の信心を獲得しているとはいえない」という意味であります。

ここで一つの疑問が生じます。「眞実信心は必ず名号を具す。」のですから無意識にでもお念仏の聲がでて下さらないとしたら他力の信心が頂戴できておらず浄土往生は難しいことになるのではないだろうか。

二、祖父の念仏、母の残した言葉

はじめに祖父の思い出から入ります。祖父は廣島の出身であり、行住坐臥に自然に「なんまんだぶ」と念仏の聲のこぼれる人でありました。尤も、住職の表も裏も見ているご門徒さんは「ご院さんの念仏は「空(から)念仏じゃ」とやゆしました。祖父は、それを耳にして素朴に腹を立てておりました。今思い返してみると、何とも人間らしい懐かしい祖父だったと思うことであります。何気ない日常生活の中でお念仏の聲が聞こえていたことは、家族に大きな安堵感をもたらすものだったからです。

一方、父母は、ご本堂で読経する等の場合は別として、家族にもわかる形で自然にお念仏のこぼれるような姿はみせてくれませんでした。父は誇り高き教育者でしたから知が先に立ち、母もお念仏の里から嫁いだと

は申せ、知らず知らずその影響を受けていたともいえましょう。以下、母の名誉のためには少々厳しい現実を語らねばなりません。安芸門徒の伝統を伝えた祖父とは異なり、家族にもわかる形で生活レベルで素朴な念仏が出ることはなかったのではないかと思われることであります。(尚、このことは私たち一人一人に課された厳しい課題だとも申せます。)

その父は三年前に亡くなりました。爾来、母に残された最後の仕事は、父の三回忌まで立派に務めあげることであったかと振り返っています。中陰から一周忌と主導的にこれに関わりました。

昨年六月末、その母がふとしたはずみで屋内で骨折しました。このため三回忌のご法座へのお参りは入院先の病院から一時外出して境内からやっと合掌だけしてお参りする仕方です。果たしました。

ところで、私は、寺報、乃至多目的地域文化誌と称する「りびんぐらいぶず」を発刊して参っております。これは親鸞聖人のみ教えをできるだけ生き生きと平易にお伝えすることを目的としております。

南無阿弥陀仏のお名号による救いの仕組みという、言葉にならない世界を言葉に映し出してお伝えするところに大きな意義があります。浄土真宗は言葉の宗教だからです。

多目的と銘打っておりますのは、御門徒さんの中陰でできる限り体系だったご法話をさして戴くことが一つ、それから、南米開教区に赴任中の新発意を後方支援するためという大きな目的があり、年間三十六回発行するまでになっております。

母が入院するまでの間は、発行の都度、誌面に目を通してもらうことができていましたので、記事を通しての会話も可能で、それが私たちの

安心材料にもなっていたのであります。

ところが、入院・介護施設に転院と日を重ねる程に、母は活字に目を通す頻度が減り、認識力が著しく減退し、終には全く受付なくなってしまったのです。もはや母とは活字を通してのお念仏のコミュニケーションを図ることができません。ですから、折角発行したりびんぐらいぶずも母との関わりでは空しく積みあがるばかりとなってしまいました。

私は随分やるせない思いになってしまいました。

先述の通り、生活習慣上、無意識にでもお念仏の声がこぼれる母ではありませんでしたから、私はいささか心配になってきました。「母は果たして真実のお浄土へ生まれることができるのであろうか」と、家族ならばこれが愚かな私の心配の種になったのです。

尤も浄土真宗のみ教えというのは、平生聞信(へいぜいもんしん)の一念に往生浄土の正しい因が決定すると言われていました。ですから生涯にひとたび如来様から賜る信心を頂戴しておれば、それにてお浄土に往生できることは間違いがありません。だから年老いて認知症に陥ったとしても何も心配することはないのだということはいえます。

しかし、一方で無意識にでもお念仏の声がこぼれ出て下さらないということになりますと「**真実信心は必ず名号を具す**」の証に接することができないことになり家族にとってそれは心配なものであります。

仏説観無量寿経の下々品では、一生涯悪事を積み重ねた極重の愚人が善知識のお勧めに遇って、お勧めのままに、殆ど吐く息に合わせるが如く十声の称名を称えます。すると聞こえて下さった十声のお名号が念々のうちに八十億劫の生死(しょうじ)の罪を消し去って下さり、彼はこ

の世の命が終わるや否や極楽の蓮の蕾の中に生まれることができたのでした。経典は語っていませんが、愚人の称名は、周りに大きな安堵の思いを残したのではなかったでしょうか。

さて、わが母の場合はどうであったでありますや。病院に入院したときはご本堂の真向かいの診療所の二階(現実には存在しません)にお世話になったと認識しておりました。そこは本堂を仰ぐ場所にあります。三ヶ月後に介護施設に入居したときは生まれ育ったお寺に戻って少女時代を過ごしている感覚に戻っておりました。施設の廊下を通る入居者をお寺参りのお同行の姿だと受け止めておりました。

半年後に、ケアセンター志賀に転院したときに次の言葉を発しました。

「ここはどこのお寺え？」と、坊守が「和邇の青木さんです」と応えると、「ああ青地さんやな(親戚のお寺)」と納得したというのです。

私は、その話を坊守から耳にして「何という有難い誤解やないけ」と申しました。なぜなら母の言葉は、転院を重ねても自らがずっと仏前に恵まれてあることに寸分疑いのない姿を彷彿させるものだったからです。

通夜にお参りの皆様へのご挨拶で、るるいきさつをご紹介した後「ここはどこのお寺え？」の一段に至って大きな感情がこみあげて来て後は言葉になりませんでした。何しろ母の残した言葉は、「私は仏前に恵まれてあるよ」と宣言して余りある言葉だったのですから。合掌(玄宥記)。

<p>正覚寺永代経 六月二十日十四時、二十時、お客僧 岡 玲師 正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より 正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より 著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内) 〒五二〇 〇五〇 一 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 0一六六 ☎・📧・mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥</p>
